

RPJ News

2013 年 1 月谷中理事長追悼号

特定非営利活動法人(NPO法人)

精神保健福祉交流促進協会 Refresh Project

〒115-0045 東京都北区赤羽2-45-8 ファーストビル赤羽205

TEL/FAX 03-5939-9603

毎月1回発行 E-mail ref-pj@mx5.ttcn.ne.jp

発行責任者: 志井田美幸/ 長野敏宏/ 仁木守

ホームページ <http://www2.ttcn.ne.jp/ref-pj/>

平成 24 年 12 月 29 日午後 9 時 5 分 理事長谷中輝雄が肝臓がんのため逝去しました。(享年 73 歳)
当協会は、谷中理事長が精神保健福祉活動の現場に 30 数年間携わってきた経験を活かし、「本音で語り合い、燃え尽きる事のないようにリフレッシュやエンパワメントできる機会と場を提供する」をスローガンに 2002 年に結成、2003 年 5 月に NPO 法人として活動を開始しました。

海外セミナー事業では 400 名以上の方に海外の先駆的活動現場に触れていただき、理事長は 2011 年 9 月迄ほぼ全てのセミナーの団長として同行しました。国内リフレッシュセミナーでは、更に多くの方と共に過ごし触れ合いの時間を大切にしておりました。

そして今回急逝した理事長に、海外からも含め多くの皆様から追悼の言葉をいただきましたので、本号は「谷中理事長追悼号」として、それらを掲載し発行させていただきます。



リフレッシュセミナーin なんぐん(2012 年 4 月 14 日)



リフレッシュセミナーin 仙台(2012 年 10 月 20 日)

© Dear Mrs. Yanaka,

It saddened me deeply to get word from Mr. Niki about Yanaka-sensei's death. The only time I met you was at that wonderful dinner in Tokyo with Dr. and Mrs. Shiraishi and Mr. and Mrs. Niki. That was also the last time I spent time with Yanaka-sensei. He was ill and did not travel to the next two Immersion programs at the Village in Long Beach. I had hoped he would recover and be at the next Immersion in December 2013.

The relationship with him was, for me, like having a "soul brother". It started with us both being "usagi", year of the rabbit. We shared the same belief in the potential for recovery for persons with mental illness. We shared the same values and goals professionally and personally. We shared the same "missionary zeal" for developing good mental health for all persons. We shared the same entrepreneurial spirit toward developing new programs. Even though we didn't speak each other's language, we communicated well through an intuitive process that used some words, lots of gestures and the use of bilingual friends like Dr. Shiraishi.

Your husband accomplished so much with Yadokari no Sato and built a model much like we did here in California with the Village. The times I came to Japan to lecture and visit programs were highlights of my professional years. Speaking to his students in various parts of Japan was always a deep and satisfying pleasure.

He died entirely too young (being the same age as I) and I will miss him and knowing that he is working at transforming mental health programs on the other side of the Pacific. I can only trust that the work he started and pursued for a lifetime will continue and be strengthened by his followers as the years go by.

It is with great sadness that I send this to you.

With deepest respect,

January 7, 2013

Richard Vanhorn

<訳文> 谷中夫人へ

仁木氏から、谷中先生のご逝去を伺い、悲しみに耐えられません。奥様にはただ一度だけ東京で、白石夫妻と仁木夫妻も交えた、楽しい夕食の席でお目にかかりました。そしてあれが、谷中先生と過ごした最後の時間にもなってしまいました。その後ロングビーチのヴィレッジで、二回の集中プログラムを行いました。先生は病を得られて、渡米されませんでした。どうか健康を回復され、2013年12月のプログラムには参加されるよう、願っていたのですが。

先生との絆を得て、私は「魂の兄弟(ソウルブラザー)」をもった思いでおりました。絆は二人がウサギ年に生まれたところから始まります。私たちは精神疾患を持った人々の回復の可能性について、同じ信念を抱いていました。専門家としても個人としても、同じ価値観と目的を持っていました。また、すべての人に良好なメンタルヘルスを広めようとする「伝道者としての情熱」、新たなプログラムを推進する企業家精神も共にしていました。お互いに相手の言葉は不得手でしたが、片言、身振り手振り、また白石先生のような両国語を話す友人の助けがあれば、直感的に理解しあえ、十分に意思の疎通を果たすことができました。先生は、やどかりの里で多くの成果を上げられ、一つのモデルを打ち立てられました。それは私たちがここカリフォルニアで「ヴィレッジ」を作ってきた過程に酷似しています。何度か日本に伺い、講演をし、プログラムに参加したことは、長年にわたる私の仕事のうちでも、最高の経験となりました。日本の様々な土地で、先生の教え子さんたちと話すたびに、いつも深い満足と喜びを感じたものでした。

あまりにも早すぎたご逝去(私と同一年です)を惜しみつつ、太平洋の向こう側で、メンタルヘルスプログラムの改正に尽力された先生のことを、いつまでも心にとどめておきます。今はただ、彼が開始し、生涯を通じて追及した仕事が続く、後継者たち

によって促進されることを信じるばかりです。

悲しみのうちにこれをお送りいたします。

深い尊敬を持って

2013年1月7日

前ロサンゼルス郡精神保健協会会長 リチャード・ヴァンホーン

◎ **Teruo Yanaka sensei who is a great leader**

To Members of the Japanese Association of Mental Health And Welfare Professionals,

I have no words to express how deeply sorry I am to hear from Miyuki Shiida-san that your president, Teruo Yanaka sensei, had passed away. I'm in shock to here this news. My prayers and thoughts are with you all during this sorrowful time. I wish to express our deepest sympathies to your association.

I felt your association lost such a great leader because he had contributed so much to mental health and welfare in Japan. Through the years that I have known Yanaka sensei, I was certain of him as a generous, kind and wonderful person of big heart and a very knowledgeable man.

I first met Yanaka sensei in 2002 through the training courses with Japanese Mental Health and Welfare Professionals. He was a great teacher and I had great respect for him. He tirelessly took members of the Japanese Association of Mental Health and Welfare Professionals to Toronto, Canada for the training of community mental health during the last ten years and also arranged training conferences and workshops in major cities of Japan. He always went out of his way to help his students and members. Our staff enjoyed his visits and learned a lot from him because he expressed great compassion in teaching community mental health.

We cherish everything he has done for us. I always thought that Yanaka sensei can live forever, and even now I still feel the same way. That is just how much impact he has done in this world.

My hospital and I extend our support to you during these tough times. We hope that even with this small gesture, we can provide comfort to your association. You will be in our prayers and we will pray for his soul to rest in peace.

We will miss his sense of humour and kind heart. We will be praying for you and please pass on our sincere condolences to his family members.

With all of my sympathy and prayers,

January 2, 2013

Mount Sinai Hospital ACT Team Program Manager Wendy Chow

<訳文> 偉大なる谷中輝雄先生

精神保健福祉交流促進協会の谷中輝雄先生が亡くなられた事を知り計り知れない残念な思いであります。きっとこの悲しみは、協会の皆様も一緒であると思います。心からお悔やみ申し上げます。

谷中先生が亡くなられ、協会は、もちろん日本の精神保健福祉の分野において、本当に偉大なリーダーを失ったと私は思います。

私は、2002年に協会の海外研修の場で谷中先生とお目に掛る機会を得ました。日本の医療と福祉の場に従事する方々に、この10年もの間、地域における精神保健についてカナダのトロントにおいて研修する機会を創ることに尽力されました。非常に優しく温かく心の広い先生であったという印象を持っており、大変尊敬しております。

また、カナダのトロントにおいての研修を通して、私どもマウントサイナイ病院 ACT チームのスタッフも先生から色々な事を学びました。

私どもは、先生から学んだことをこれからも大切にして、学んだことは、我々の中に引き継がれ、永遠に生き続けると信じています。

私どもは、微力ではありますが、今後も精神保健福祉交流促進協会を支援し、また、協会の安定を願っております。そして、ご家族様に心よりお悔やみ申し上げ、谷中先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2013.1.2

マウントサイナイ病院 ACT チームプログラムマネージャー兼トロント大学医学部准教授 ウェンディー・チャウ

◎ In mamoriam

I learnt the sad news from Prof. Fujii. It is a great loss for the movement, but he was a great teacher and left a lively heritage. Please extend my condolences to the family, colleagues, pupils and to all the people that knew and loved him.

Lorenzo Burti

<訳文> 追悼文

藤井先生から悲報をお聞きました。社会運動を展開する上で、とても偉大な損失です。彼は偉大な先生であり、私たちは金字塔を失いました。家族・同志・学生、そして彼を知り、彼を愛した全ての人々に心から哀悼の意を表します。

イタリア・ヴェローナ大学 教授 ロレンゾ・ブルチ

◎ In mamoriam

I'm very sorry for the death of Prof. Teruo Yanaka. It's a loss for everyone of you, but for me too. I'm close to you.

Many greeting

Aldo D'Arc

<訳文> 追悼文

谷中輝雄先生がご逝去され、非常に残念に思います。それはあなた達全てにとって損失であり、私にとっても同じです。私はあなた達と共にいます。

心から哀悼の意を表します。

前イタリア・アレツォ県精神保健局長 アルド・ダルコ

◎ 谷中先生の追悼文

物腰と人当たりの柔らかな谷中先生は金の糸で社会を織り成しました。その錦絵(ビジョン)は精神障害者自身がどのようにして自信を持って社会復帰をし、希望を持って人生を送ることが出来るか、ということでした。先生のビジョンと希望と愛により 1996 年にヴィレッジセミナーとメンバーによる日米交流プログラムを発足されたことは何よりの証です。これらのプログラムを通して精神障害者のみならず精神保健に携わる人々に種々の形で目を開かせてくださいました。ヴィレッジセミナーのシンボルであるダッキーは羽があり飛ぶことが出来ます。古いしきたりを踏まえながらもそれを乗り越え新しい事に挑戦することが可能であることを学びました。ダッキーが空を飛ぶのです。

谷中先生、リチャード・ヴァンホーン、秋吉光雄によって作られたダッキービジョンはこれからも多くの心と情熱のある方々に受け継がれて行くことでしょう。

千の風になった谷中先生は世界のどこかで先生を想い必要としている人々を見守って下さると同時に残されたわたくしたちが先生の残された錦絵をこれからどのように完成させていくかという課題を見守って下さると、わたくしは信じます。

ヴィレッジセミナー窓口 ロサンゼルス在住 秋吉芳美

◎ 谷中先生の追悼文

H24 年 12 月精神保健交流促進協会の総会が延期、谷中先生が入院されたので退院後に開催するとのことでした。最近谷中先生に会える会には出来るだけ参加、リフレッシュセミナーの意義を感じ始め、ようやく先生の言われている燃え尽きを防ぐための参加の意味がわかり 3 年間は皆勤。H23 年秋のリフレッシュセミナーを大分・中津で持てました。先生の「早くしないと間に合わないよ」と言われたのもひと押しで何とか開催、懇親会に賞味期限切れのビールを倉庫から出したことは今もって後悔、「借りは返したよ」と言われた先生のお言葉は忘れられません。クリニックを開き 18 年、社会復帰の道が見えず少しばかりの情報でやどかりの里にたどりつき、先生の温情に夫婦共に谷中先生を頼り今まで歩んできました。ヴィレッジ研修が皮切りで御荘でのリフレッシュセミナーには大勢で押し掛け、夜は公民館で先生と当事者とが雑魚寝。朝起きると中津の当事者たちが先生を覗き込んでいた話にも今も大笑い。それから多くの時間が過ぎました。私たち夫婦も共に忙しくなり 2 人の道が見えなくなり始めたころにお聞きしたことです。「寄る港・港に女がいるんだよ」と豪言する先生の活動に、奥さまがある日「どこを見てるんですか」と聞かれたそうです。「天(神様)を見ているんだよ」と答えたらなにも言わなくなったとの助言を頂いたことを思い出します。H24 年秋の仙台のセミナーがお会いした最後。この時開催された半田先生が「谷中の生活支援を読みなおして下さい」と言われたので本を紐解いて、今度お会いしたらこれを聞こうと読み直しています。先に逝かれた事は残念ですが教えに従い精神障害への生活支援の「ごく当たり前の生活」の道の実現を私なりに歩んでゆきたいと思えます。これまでの事すべてに感謝、御指導ありがとうございました。

大分県 寺町クリニック 太田喜久子

◎ 谷中輝雄先生へ

谷中輝雄先生がご逝去され、早いもので・・・、1 ヶ月が過ぎようとしています。ご家族様にとっては、この 1 ヶ月が、もしかしたら、10 年位に長い時に感じられたかも知れません。心よりお悔やみ申し上げます。

谷中先生と過ごした時は、他の皆さんより、遥かに少ない私ですが、それでも沢山の思い出があります。

今から、12 年前に、援護寮を立ち上げる時に、とても印象深い考え方をご指導くださいました。これが、現在の

わたくしの心の力になっています。

「志井田さん、施設を作った時に、そこを利用する人たちに何かをして貰わなくちゃならない。と、思ったら駄目だよ。この施設で、何かをするのではなく、今後の自分の進む道を考えて貰えるように、ゆっくりと暮して貰えばいいんだよ。特別な事は要らない。何もしないけど安心できる場所がいいんだよ。」と、教えて頂きました。

ご指導頂いた 12 年前の、電話から聞こえた優しい声を今でも忘れません。このことは、現在では、ご利用者様にも、職員さんにも……。根付き、大きく枝を伸ばしています。これからも……。そして、ゆっくり自分を見つめて、何かしたくなつたご利用者様は、次の暮らしに向かって行きます。

谷中先生、暖かいご指導を賜り本当にありがとうございました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(社福)町にくらす会 志井田美幸

◎ 谷中先生を偲んで

協会の事務局から連絡があったのが昨年 12 月 29 日。その訃報は私にとってあまりにも突然で、驚き、悲しみ、寂しさが同時に押しよせ、落ち着かない夜となりました。海外・国内セミナーを通じて全国に仲間や知人がたくさん出来たのは、先生のおかげです。浅学な私に、励ましご指導をいただいた事は心に刻まれ、誇りとさえ思っています。

いつもお優しい声で、そして笑顔で語られる谷中先生の事が、私は大好きでした。

谷中先生のお元気な頃に「先生、今度尾道にお見えになった時はアナゴの刺身をごちそうしますよ」「そりゃー食べたことないなあ。尾道はタコの天ぷらも美味しいよね」この約束が果たせなかったのが残念です。タコ天、好きだったのかなあ……。

谷中先生、ありがとうございました。おつかれさまでした。

(社福)尾道のぞみ会 高垣^{よしゆき}孔幸

◎ 谷中理事長の追悼文

「ピンチはチャンス！」「来るものは拒まず、去るものは追わず！」「私が」……

よく聞いていると温厚な笑顔と柔らかい口調で、鋭く強い言葉がタイムリーに発せられます。物事を極めるうえでの上級の手段を天性として授かっておられたのでしょうか。多くの関係者がうなります。にもかかわらず、何ということでしょう。喜びや楽しみや憂いや嘆きなど、率直に表現されます。豊かな人間性の持ち主でした。

いつからかヴィレッジセミナーツアー時には、「私が元気なうちに一緒にしましょう」と言って、参加者に呼びかけておられました。すると、いろいろな方があちらこちらから集ってきます。しかし、2010 年 12 月第 18 回が団長最後になりました。その後、「20 回目には、記念のお祝い会を兼ねて、これまで参加された方々にお声がけしましょう」と回復の目標にされておいででしたが叶いませんでした。

12 月 29 日午後、病院には大勢の方がお見舞いに駆けつけ、待合室はそここの顔見知りの人々でいっぱいでした。先生はいつもたくさんの人に囲まれていて、人をエンパワメントし、またご自分も人によってエンパワメントされていたのですね。「人は生きてきたように死んでいく」という言葉にふさわしい立派なご臨終でした。

年末に事務局がご自宅にご報告に伺ったときには、いつもと変らぬ口調でよく話されていたが、それがお声を聞いた最後になってしまいました。

やどかりの里で 10 数年、交流促進協会でも 10 年、仕事をさせて頂きました。いろいろな出来事を思い出します。

全て私にとっては貴重な学びの場でした。ただ、先生にはいつもどこかで清廉潔白さと完璧さを求めていたような気がします。多少きつい存在だったのではないかと・・・。「先生、それはちょっと？」と首をかしげると、「そうかあ。」とよく頷いておられました。今となってはなつかしい思い出です。事務所に毎週金曜日に見えていましたが、「リハビリを兼ねて、週1から始めて、最終目標は精神保健福祉交流促進協会の仕事だけをする事だよ」とよく聞きました。なかなか移行ができないご多忙さでしたが、それもこれも全て、杵や壁のない自由闊達で流動的な関係こそ生きる人間の持つすばらしさであることを私たちに教えてくださったのだと思います。

衷心より哀悼の意を表しますと共にやすらかなる日々の中にあられますことをお祈り申し上げます。

特定非営利活動法人精神保健福祉交流促進協会 仁木美知子

◎ 谷中さんと、私たちと・・・

谷中さんがご逝去されました。もちろん実感は全くなく、今でもニコニコと、常に、エールを送り続けて下さっているような気がしています。遅々とした歩みの日本の精神保健医療福祉と闘い、自ら実践し、仲間を助け、数えきれないほどの後進を育てられました。しかし、あまりに若すぎる死は、本当に残念でなりません。ここに最大の哀悼の意を表します。

御荘と谷中さんの出会いは1979年のやどかりの里「精神障害と社会復帰」創刊号での共同住居実践報告。御荘の社会復帰施設平山寮によってつながりました。その後、やどかりの里への研修、また、4年に一度おいでいただいたの研修会、ヴィレッジセミナー、精神保健福祉交流促進協会の全国各地でのリフレッシュセミナー、トロント、バンクーバー、イギリス、イタリアツアーなど、御荘だけでも決して大げさではなく数百人におよぶ仲間が、かなりの回数、ゆっくりと、また密度の濃い時間を谷中さんと過ごさせていただき続けてきました。もう4代、5代と代替わりしてきた御荘の実践を、変わらず、ずっと同じ目線で見守り、エールを送り続けて下さっている方はもちろん他には見当たりません。

私自身も書ききれない程の思い出があります。初めてお会いしたのはやどかり研修センター、ヴィレッジセミナーのプレ勉強会でした。まだ29歳。その後、ヴィレッジセミナー、交流促進協会の立ち上げ、ヴィレッジセミナーの同窓会としての「なんぐん夏期セミナー(リフレッシュセミナー第1回)」の開催と続きました。確か、夏期セミナーでは魚市場横の集会所に半田さんと共に、何十人で雑魚寝をしていただきました(笑)。また、厚労省の検討会の構成員をつとめ始めてから、大きく迷い混乱し、あわててご一緒させていただいたイタリアツアーも忘れられません。激しく揺れた私自身の30代を、変わらない視線でずっと見守り続けていただいていたことに、これを書きながら改めて気付かされています。「バーンアウトしない」「リフレッシュ」という視点に出会わせていただければ、また、多くの仲間と引き合わせてもらってなければ、間違いなくこの世界を去っていたような気がします。

書き始めると、やはりキリがありません。これ以上書くと、すべてが過去のことになってしまいそうなのでこれくらいにします。

昨年の4月御荘でのイタリアセミナー、イタリアの課題と未来を語るダルコ先生、それに日本の未来を重ね合わせて地域に伝えてくださった谷中さん。私たちは忘れず、まだまだ前に進まなければなりません。谷中さんがつなげて下さった多くの仲間と、そして、谷中さんと・・・。

(財)正光会 御荘病院 長野敏宏

◎ 谷中先生にいただいたもの

私が始めて谷中先生と出会ったのは、平成6年9月6日から1週間「やどかりの里」の援護療で宿泊研修させていただいたときであり、この出会いが私の人生のターニングポイントになりました。当時、私は市福祉事務所のケースワーカーでしたが、精神に障がいをもつ人たちとの関わり方がよく分からず、仕事に行き詰まりを感じていまし

た。そうしたなかで、やどかりの里が目指す《どんなに重い障害を持つ人でも「ごくあたりまえの生活」が営めるようにする。》ことについて、先生に丁寧にご教示いただいたことは、今でも忘れられません。また、援護療でメンバーと寝食を共にしながら様々体験をさせていただいたことや夜遅くまで語り合ったことは、私のなかに密かに、しかし確実に存在した暗い部分(偏見・誤解・差別する心)を取り去ってくれるものでした。

メンバーの中には、自身の障がいを受け入れつつ、作業所での仕事に自信と誇りを持っておられるなど見習いたいと思う人が何人もおられました。結局、人間的に尊敬できるかどうか、障がいの有無は関係ないこと、障がいがあっても適切なケアをすれば社会生活を送ることができることを確信しました。以降、市のどこの部署に配属されようとライフワークとして関わっていこうと考えるようになりました。

その後も、先生には様々な出会いをいただきましたが、なかでも最大のものはヴィレッジとの出会いでした。ヴィレッジの理念、①チームによる支援、②徹底した自己決定、③ハイリスク・ハイサポートなどを単に知識として教わるのではなく、現場で実際に触れて感じる事ができたのは貴重な体験でした。特に自分の人生は自分で背負わなければならない。スタッフがメンバーの人生を背負うわけではなく、メンバーの人生においてスタッフは共に肩を並べて歩く存在であるという理念は、私の考え方に大きな影響を与えてくれました。

また、ヴィレッジ研修の成果のひとつとして、全国の様々な職種の人達との出会いがありました。このつながりから、リフレッシュセミナー(アフターヴィレッジ研修)が、平成 12 年愛媛県愛南町(旧御荘町)を皮切りに始まりました。今年 5 月には出雲で第 20 回を開催する予定であり、当然、先生にもおいでいただけるものと思っておりました。

今後は、先生が最も心を砕いておられた「精神保健福祉活動の現場で活躍する人々が、多忙な日々の活動で燃え尽きることはないように、リフレッシュとエンパワメントできる機能を十分に考慮した事業を展開すること。」を私個人としてはもとより、全国の仲間とともに考え、実行していきますので見守っててください。

出雲市 三島武司

◎ 追悼のことば

谷中輝雄先生が逝ってしまわれた。肝臓がんと闘っておられると知った時から奇跡を望みつつもいつかこういう日が来ると思っていた。残念でたまらない。優しい語り口や柔らかな物腰、穏やかな笑顔からは想像できないくらい不屈の精神の持ち主であった谷中先生もがんには勝てなかった。二人に一人はがんで死ぬ年代である。私も死ぬ時はがんで死ぬだろう。そうだとしても、尊敬する偉大な先輩の訃報によって言葉を失い重い気持ちを抱えたまま毎日が過ぎていく。

私たちは、1987 年に“精神障害のある人がごく普通に暮らせる社会づくり”を共有する理念として「出雲の精神医療を考える会(現在の“ふあっと”)」を立ち上げたが、当時から谷中先生は私たちの行く手を照らす巨星であった。精神衛生法から精神保健法へ変わり、精神保健福祉の流れが急速に変わりだした時代であったが、谷中先生が、はるか以前の 1970 年に当事者の人たちと一緒に生活することで始められたやどかりの里の活動は、精神保健福祉活動にとって何が必要で大切なのか理論的にも実践的にも私たちにとって道標となった。

谷中先生によって切り開かれたわが国の精神保健福祉の流れはその後、大きなうねりとなって現在も続いている。精神病院の病床数はほとんど減らずまだまだ沢山の人が入院している現実は変わっていないが、この流れが絶えることはない。谷中先生の思いは後に続く人たちの心にまちがいなく届いているが、次の時代にどのように継続していくのか、あらゆる場所で問われているだろう。

谷中先生がやどかり・ヴィレッジセミナーとして始められた海外研修も、多くの人にとってこの上ない体験となっただけである。私も平成 8 年の第 2 回ヴィレッジセミナーに参加し、ロングビーチで毎夜のごとく遅くまで先生と語り合ったことは忘れられない貴重な思い出である。結局出雲からは都合 26 人がヴィレッジに行き、先生の指導のもと大きなエネルギーを持ち帰った。

ヴィレッジセミナーの延長線上に位置づけられた精神保健福祉交流促進協会は、谷中先生の思いが結実したものであるが、谷中先生の果たされた役割の大きさゆえに、先生亡きあと協会はどのように運営されるべきなのだろう。協会の今後には谷中先生がどのような思いを持っておられたのだろうか。もっという先生方の思いをお聞きし

ておきたかった。残念でたまらない。

谷中輝雄先生本当にお疲れ様でした。安らかにお眠り下さい。 合掌

エスポアール出雲クリニック 高橋幸男

◎ 谷中先生のおもいで

精神科医の道を進むことの迷いが薄れた昭和57年だったと思う。二年間の大学研修の後、御荘病院に勤務し、しばらく経った。御荘保健所の松田保健婦さんの訪問にたくさん連れて行ってもらい、地域精神科医療のおもしろさを感じ始め、腕と頭が悪いのは足で稼ぐしかないと感じ始めた頃であった。渡部嵐の書いた平山寮のレポートを「精神障害と社会復帰」創刊号に載せていただいた「やどかりの里」を訪ねようと思った。やどかりの里の実践や谷中輝雄の名前は出版物では見たことがあるが、中味は当時のペーパーの医者である私にはわかるはずはなかった。

大宮駅を降り、中川の火の見櫓の半鐘をみて、ああこも田舎だと少し安心しながら、一人でやどかりの里を訪ねました。やどかりの里、どこにもある平屋の住宅の茶の間で、谷中先生に初めてお会いできました。会って間もなく、この方は、谷中先生とお呼びする以外はないと思いました。体調を崩され、療養から現場復帰間もないと聞きましたが、柔らかな語り口で語られる内容のすごさと、家族や当事者と交わす慈愛に満ちた態度、その接し方や言外から自然に伝わる考え方の基本は、目の前にある最良の生きた教科書・先生だとすぐに思いました。

家族会の方々が作られた暖かな夕食、ゆったりと居れる時間や空間のなかで夜を過ごしました。翌日、やどかりの里の当事者グループや家族会活動の一端を見せていただき、暖かな仕組み作り、全国に開かれた視野、揺るぎない理念と戦略的な考え方を教わりました。その後もわかりの悪い私を、訪れる度に確かな情報とともに励ましていただきました。精神衛生法改正の方向性と地域福祉の中味は、先生とお仲間がつくられたものだといつも思ってきました。

昭和60年秋、先生にご講演に来ていただいた「精神衛生を考える会」大会が、南宇和の地域活動のスタートとなり、その後も定期的に南宇和郡・愛媛に訪れていただきました。私達に確かな指針と希望を、そしてたくさんの人との出会いをいただいたご恩は言葉では表せません。

人との出会いをつくり、人を育て、癒やし、各自の方向性を確かめながら勇気と元気と希望を生み出す仕組み・当協会を創っていただきました。その価値を確認しながら行う今後の活動を、天上より温かく見守っていただきたくおもいます。数えきれないご恩に感謝しながら……。

(財)正光会 宇和島病院 渡部三郎

◎ 谷中先生への感謝を込めて

谷中先生の訃報に接し、どう受け止めれば良いのか混乱したままこの原稿を書いています。

私が谷中先生に最初にお会いしたのは病院のPSWの仕事始めた、三十数年前の富山の研修会場でした。先生の印象は「そこに居られるだけで、存在感、安心感があり、『こんな魅力的な方がおられるのだ。』という深い感動を伴うもの」でした。

その後も富山には北陸精神医学ソーシャルワーカー協会の研修会、平成8年の日本精神医学ソーシャルワーカー協会富山県支部の設立や、富山県精神障害者社会復帰施設連絡協議会の設立前の講演会等々、何度となくお来しいいただき、その都度、様々なことを教えていただきました。

また、1995年12月の第1回の「ザ・ヴィレッジセミナー」にお誘いいただき、素晴らしい方々との出会いや感動、そして、将来へのビジョンをもつ機会を与えて下さったのも谷中先生でした。谷中先生の足跡はやどかりの里での実践、日本精神医学ソーシャルワーカー協会の理事長、全国精神障害者社会復帰施設協会の会長、精神保健福祉士養成校協会の会長、精神保健福祉交流促進協会の理事長等々ですが、年齢も違い、そして、活動の

地域も違うにも関わらず、何度もお会いし、指導を受け、私の人生の方向に大きな影響を与えた方、それが谷中先生でした。

今までを振り返ると、精神医療、保健福祉、教育の分野で夢を持ち続けながら、何とか仕事を続けてこられたことは、谷中先生の存在をぬきにしては考えられないと改めて思いました。お世話になることばかりで、何も、お返しできないまま、「ありがとうございました」という言葉以外見つからない、そんな今の心境です。

谷中先生と最後にお会いしたのは、昨年4月、円山公園の枝垂れ桜が美しい京都でした。

私は谷中先生からご紹介をいただいた、京都の専門学校で仕事を始めたばかりでしたが、イタリアからダルコ先生が来日され、勤務先の京都医療福祉専門学校の会場でも2度の講演をいただけることになり、谷中先生、仁木さんご夫妻、大阪の小出さんにお世話になりながら、専門学校の45周年記念事業の位置づけでもあったため、学校の理事長や職員の方々と共に関わらせていただいた時のことでした。

講演会の前日、ダルコ先生に「京都を満喫していただきたい」との学校の理事長の思いもあり、京料理を味わっていただいた後に、近くの円山公園に谷中先生、ダルコ先生、仁木さんご夫妻、理事長と私の6人で散歩にでかけ、たまたま見た満開の枝垂れ桜は、言葉にならないほどの美しさでした。京都での先生は大変お元気な様子で、ホテルでお出迎えした時も、ダルコ先生との夕食会や、講演前の挨拶でも何時もと変わらぬ、夢と情熱をもって話をされていたのが印象的でした。

京都での予定がすべて終わり、お別れする時に固い握手をさせていただきましたが、その手は柔らかで温かでした。

京都医療福祉専門学校 藍田寿弘

◎ 恩師の教え、帯広・十勝で

思いがけず受診を始めてから、もうすぐ丸2年になろうとしています。まさか自分がと思いつつも、現に調子が出ない、むしろ悪い調子が出現する。日常生活や周囲(家族、職場、交友関係等々)にさまざまな悪影響が及び始めたのですから、受け入れるしかありません。

そんな折、かねてよりお世話になっていた障がい者支援施設に勤める知人の誘いで、地域で暮らす高齢者のニーズ調査を手伝ったのが一昨年。延べ1,000人を超える聞き取り調査から得たものは「ほんの少しの支え、ちょっとした手助けがあれば、これからも住み慣れた地域で暮らせる」ということ。逆を言えば「ほんの少しの支え、ちょっとした手助けがないから、住み慣れた地域での暮らしをあきらめざるを得ない」ということです。

「支え合いのコミュニティづくり」とは古くて新しい課題ですが、これを単なる標語としてではなく事業として始めたのが、この4月にオープンした「市民活動プラザ六中」(6プラ)の試みです。今年度はここでコンシェルジュを仰せつかりました。

市内で最も高齢化率の高い、帯広市東部地域を校区としていた旧帯広第六中学校の廃校跡を活用した複合型福祉施設で、さまざまな福祉・文化団体の事業所が「テナント」として入居。他方、独自の事業として、地域の支え合いを促進するための「仕掛け」も随所に用意されました。1食300円程度で昼食が食べられる「一日食堂」や、さまざまな文化・音楽活動で地域に貢献しようという「おとな部活」、誰もが取り組める体力作りと孤独の解消にと始まった「八の日ジャンプの会」、広い校舎内を活用した「ウォーキングコース」等々、いずれも「サポーター」と呼ばれるボランティアの創意工夫によるものです(現在登録者は97名)。

こうした試みを通じて、障がい者や地域住民同士のごく自然な出逢いを演出し、互いに共通する関心事や活動で関係を深めてもらい、6プラの外でもそうした関係を保ってもらえれば、支え合える関係は再び生まれるはず。未だ「確証のない信念」ですが、試行錯誤の毎日です。

かつて、恩師・谷中輝雄は「ステップ方式はとらない」と言いました。自炊はできるか、金銭管理はできるか、コミュニケーションをとれるか、近所づきあいにはできるかなど、(支え手が)社会生活上マスターしてほしいことを一つひとつクリアしないと、地域で暮らせないのではない。仲間やスーパーや、周囲にあるさまざまな力を借りれば、地域に住み続けることはできる。否、そもそもそれがごくあたり前の地域社会のあり様なのではないか…と。

自分ができるコトや得意なコトで、困っている誰かのためになる。さりげない関係が地域のそこかしこに生まれ、「おたがいさま」のコミュニティ再生を実現したいものと願っている。恩師の教え、ここ帯広・十勝で微力ながら受け継いでいきます。合掌

帯広市 齋藤征人

◎ 谷中先生ありがとうございました。

谷中輝雄先生が亡くなられた。

今となってはお別れの言葉を申し上げられなかったことが残念でならない。とは言っても、私は谷中先生について、ほんの少ししか存じ上げていないと自負している。

谷中先生と私を結びつけていたのは、バンホーン氏をはじめとするヴィレッジの職員やビルコンプトン氏らプロジェクトリーダーのメンバーとの交流である。私は高い志を持っていたわけでは決していないが、楽しい時間を過ごす中で、いろいろ貴重なことを学ばせていただいた。

私の中では、谷中先生が長島茂雄氏とダブって見える。そういう感じになったのは、先生から御著書である「生活支援」をご恵贈賜ったとき以来である。谷中先生は、ご自分の著名の上に、私の名前を書いてくださったのであるが、それは「弘巳」ではなく、全く別の名前であった。そんなことに頓着しない谷中先生のことを改めて長島元監督と重ねてみると、いろいろ共通点が見えてくる気がした。それをあえて一言で言ってしまうと「愛されるリーダー」である。

谷中先生は私が精神保健福祉士の養成校に勤務するようになってからも気にかけてくださり、畏れ多いことと思っていた。私はただの「不肖」であって、谷中先生から「弟子」と思われていなかったことは間違いないが、谷中先生が起こしたものを、わずかでも承けるか、展開させることをもって、これまでのご厚誼に応えられたらという気持ちを新たにしている次第である。

谷中先生、今まで本当にありがとうございました。

安らかに眠りください。

東洋大学ライフデザイン学部 白石弘巳

◎ 谷中先生を偲んで

年末に届いた突然の訃報に驚きました。昨年 10 月仙台で開催されたリフレッシュセミナーで一緒させていただいたので、「まさか・・・」と信じられなかったです。

私は、何年に行ったか記憶は曖昧ですが、矢田さんをはじめ、ふあっとの会員とやどかりの里に行かせてもらい、やどかりの里の成り立ちに感銘しました。さらにその後、第 7 回ヴィレッジセミナーに参加した時、昼間の研修だけでも濃い内容なのに夜には、谷中先生の部屋で熱いミーティングがありました。私にとっては、強烈な印象でしたし、何とエネルギーのあるタフな先生だなと感心しました。

今、私はデイケアに勤めながら、医療モデルから生活モデルへの転換を提案された先生の思いを実感しながら利用者に関わっています。「まだまだご教示いただきたいことはあったのに・・・」と思っています。きっと、先生ご自身も早すぎる死に無念ではなかったかと思います。これからは先生の活動によって繋がった全国の仲間たちが、先生の意志を受け継いで精神保健福祉の今後を考えていかなければならない大きな使命を託されたように思います。

先生の残された業績に敬意を表し心よりご冥福をお祈りいたします。

エスポアール出雲クリニック 精保士 高尾由美子

◎ 谷中輝雄先生を偲んで

平成 63 年頃、当時勤務していた病院宛てに、何の前触れもなく、それまで全く交流もなかったやどかりの里から寄付依頼があり、院長はこれに応じた。今でもよく寄付したものだと感じている。それから、定期的に情報誌が送られてくるようになったが、私はそれほど関心を持たずに経過した。

同病院がいわゆる社会復帰施設を開設することとなり、同院長の指示により、平成 7 年 11 月に 2 週間、やどかりの里で研修を受けることになった。研修の依頼か何かの用件で電話をした際の応対に不快になったが、少ししてから利用者であると分かった。これを真似て開設した授産施設では、収益にはならなかったが、施設管理の仕事の一部を利用者に任せた。

研修センターに寝泊まりして、あちらこちらの作業所や生活支援センター等で見学や作業をして、雰囲気がよくて、徒歩で通いやすかった作業所で、販売用の作品作りの手伝いをした。そこで、仁木美知子さんと知り合いになれた。

谷中先生は精神科病院と闘ってきた人だと聞かされていたので、強面で詰問されるようなことがあるのではないかと心配して臨んだが、杞憂に終わった。第一印象は穏やかで仏様のようにであり、達観した人はこのようになるのだろうと思った。

先生にやどかりの里の利用者の中に、勤務先の病院の患者と顔や雰囲気そして症状も似ている人がいることに驚いたと話すと、外国にもいるとのことであった。

ケース検討会の中で、症状が再燃し、職員が 24 時間態勢で対応している利用者について、先生が「入院すると悪くなる」と話されたことに、ショックを受け、何てことを言うのだろうと反感を持った。ここで病院と闘ってきた姿が垣間見えた。後で先生に訊ねて、合点がいった。入院によって地域生活が途切れてしまうことが悪い。また元の生活に戻るまでに時間が掛るという意味だった。今では入院が必要であっても短期間が当たり前になっている。また、別の場面で、「反医療ですか」と訊ねると、「非医療だ」と返答されたので、やっぱり闘っていると思った。

別の職場に移ってから、その職場で、また県の精神保健福祉士協会の研修会で先生に御講演をお願いして、やどかりの里の利用者にも来鹿してもらった。関連病院の事務長が先生のことを『人の金で患者と一緒に旅行している』と言っているとのことであったが、無視した。全国には活躍されている多くの先輩方がいらっしゃるが、やっぱり先生が頼りになる存在だと思ったので、自分は『ヤナラー』だと名乗ると、笑っていらした。

先生が北海道に行かれてから、大学の公開講座に何回か通った。また、記憶違いかもしれないが、ヴィレッジのデービッド・ピロン氏の講演会に参加した。英語を話せないで、ただいだけであったが、懇親会の会場のビール園で質問して、ヴィレッジの利用者には触法精神障害者の割合が高いことを教えてもらった。

また、先生が来鹿された折に今の職場に転職する予定であると話すと、やどかりの里で、触法精神障害者の受入れに当たり、職員や利用者の中に、強く反対する人がいて、苦勞されたこと教えてくださった。

このことは、頭の片隅にあって、触法したことのある精神障害者が地域にいることは普通のことだが、地域に馴染むまでは慎重さが大事だと教えてもらったと思った。今の仕事でも気をつけていることである。

精神保健福祉交流促進協会のリフレッシュセミナーでは、奄美大島や指宿まで来てくださった。奄美大島では初めてストレス解消や癒されるとは、「忘れること」だと実感した。それまで、仕事のストレスは仕事でしか解消できないと信じていた。先生は下手だと自嘲されながら、カメラを向けていらした。御多忙の先生が日常を忘れられる時間だと思った。

小樽での宿泊先では先生と同部屋になったが、お疲れがあるように感じた。私が再三の国内外の研修の誘いに応じなかったのも、先生と御一緒できたのはこれが最後になった。

今の職場で地域処遇に携わる関係機関のうち、いわゆる社会復帰施設の有り様に接し、数年前から先生のお考えを訊ねようと思っていた。年末に電話しようかと思ったが、何年も不義理をしていたので、躊躇した。3月までにはお会いしようと思ってしまい、とどまったことを後悔している。まだまだ教えていただきたいことがあった。

先生から最後の年賀状をいただいた。力のない文字があった。また後悔した。先生は御自分の命を削って闘ってこられた。正月はこれまでのこと思い出しながら、後悔しながら、過ごした。

先生、ありがとうございました。もう闘わなくていいのですから、ゆっくりしてください。合唱。

鹿児島 靄真一郎

◎ 谷中先生の追悼文

「谷中輝雄先生が亡くなられた。」このことを事実として受け入れることが、今なお私にはできていないのかもしれませんが。先生の死を想像するだけで、私のこれまでとそしてこれからの生が色あせてしまうような、そんな感覚を拭えないまま今日を迎えています。

精神保健福祉領域にその身を置かない多くの人には、どこの誰とも知らないひとりの死としてしか映らないことでしょう。しかし、先生と過ごした時間を日常的に、あるいは僅かであっても共にし、先生の人となりを知る者からすれば、自分の生のある大切な部分を奪い去られてしまったという思いが、心を支配して止まないのです。

ここ数年、先生にお会いする機会が少なかったこともあって無念でなりません。先日ようやく先生と一緒に写した写真を見ることができました。写真の中の先生はどれもみな笑顔でいらっしゃることに驚きを感じたのと同時に、何故か自分自身が恥ずかしくなりました。

「しっかりしろ。進むのは前だろう。」これは、十数年前に地域生活支援の現場で葛藤し迷う私が先生からプレゼントしていただいた言葉です。

今、まさにこの言葉を噛みしめて、これからも先生を追いかけて生きて行く覚悟です。先生には、どうぞごゆっくりお休みください。先生のご冥福を心よりお祈りしています。

四国学院大学社会福祉学部 西谷 清美

◎ 谷中先生の追悼文

暮も押し迫った2012年12月29日夜、私はちょうど年賀状を書いていた。22時をまわった頃だろうか、当会の理事長の高垣孔幸から電話が鳴った。「谷中先生がお亡くなりになった」

「ええええええええええ！！」そこから1時間ほど何をしたのか記憶がない。何度思い出そうとしても思い出せない。しばらくしてようやく我に帰り、当会の関係者に連絡を取る。少し落ち着き、書きかけの年賀状を見ると、ちょうど谷中先生宛の年賀状を書くところであった。虫の知らせか…。

先生が1年程前から闘病生活をされていたのは聞いていたが、風の噂で随分元気を取り戻されたとも聴いていた。春の出雲のセミナーでお会いできるかもと楽しみにしていただけに、突然の知らせにボー然としていた。ただ、不思議と涙は出なかった。

「こんなことなら、用事をすっばかしてでも無理矢理でも御荘や仙台のセミナーに参加すれば良かった…」後悔の念でいっぱいになる。

そして大したこともできぬまま正月を迎えると、谷中先生から年賀状が届いていた。直筆で一言「元気で何よりです」。涙があふれ出た。久しぶりに男泣きした。

あれから少し時間が経過し、ようやくこの原稿を書く筆をとったが、正直筆が進まない。私のような若輩者が、日本の精神保健福祉の開拓者である偉大な方について語ることは恐れ多いと思っている。また、書くことで先生のご

逝去を受け入れてしまうことに抵抗を感じているのかもしれない。だが、書く機会をいただいたことは、とても名誉なことであるので、なんとか振り絞って書かせていただくことにした。

谷中先生の功績については今更述べるまでもないだろうし、他の方々にお任せするとして、谷中先生と尾道との接点について少しご紹介させていただく。

当会の前理事長であった故・高垣等によると、谷中先生と尾道の接点ができしたのは、今から 39 年前の 1974 年からになるらしい。当時、尾道の家族会結成にあたり、高垣は先進の取組みをしている“やどかりの里”へ視察に赴き、谷中先生に「わしのような聖人君子でない者がやってええもんじゃろうか？」と相談したところ、場に同席していたお茶の給仕をしてくれた年配の女性から「この人も“べらんめえ”で、聖人君子ではないですよ。人と喧嘩してばかりですよ。」と言われ、先生が苦笑いをしていたという。お若い頃は血気盛んであったらしい。そこから意気投合し、翌日の朝まで飲み明かし、さらには谷中先生に尾道の講演会での講師までお願いしたらしく、同年、谷中先生が来尾されたという記録が残っている。そこからお付き合いが始まったようだ。

私自身が先生と初めてお会いしたのは、約 17 年前に広島で開催された「やどかりセミナー」だったと記憶している。高垣等、地域の民生委員、当事者の方と私の 4 人で参加し、谷中先生の講演を拝聴した。講演後、高垣等の紹介で挨拶をさせていただいた。大尊敬している高名な先生なので、とても緊張していた私に、「よろしく。尾道もようやく高垣さんの妄想が現実の形になってきたようだね。あなたのような若い力に期待していますよ。」と声をかけてくださった。

その後、ヴィレッジセミナーに参加した私は、ドジをして足を骨折するという大失態をおかし、セミナーを半日欠席することになり、ホテルの部屋で落ち込んでいたところ、先生がサンドイッチとコーヒーを持って部屋に来てくださり、特別に個人レッスンをしてくださった。これは本当に嬉しかった。骨折しても良かったと思えたほどだ。笑顔で「おまえは馬鹿だねえ」と言いながらも、事ある毎に配慮してくださった。

それから尾道にも何度となく足を運んでくださり、事業の相談などさせていただくようになった。その度に痛感したのは、知識・経験・情熱はいうに及ばず、圧倒的な程の覚悟の差であった。またその覚悟をサラリとおっしゃる。私のような未熟者にはその覚悟を持つことが至難の業である。覚悟をどう腹に据えるかで、その先の展開が変わってくると教わった。

先生は仙台白百合女子大学の教え子も尾道へ実習に来させた。学生には実習のみならず、友人としてお付き合いしてくださっていた高垣等の半生を取材して来いと密命を下していたらしい。しかも実習を受けてくれたお礼にと、急遽、地域の方への啓発活動の協力(講演会の講師)を申し出てくださった。これらのことは高垣を大いに嬉しがらせた。しばらく高垣はお酒が入ると、この話を自慢のようにしていたのを覚えている。先生は、そういった相手の喜ぶ、かつ距離の近いお付き合いをしてくださる方だった。

高垣等が亡くなってからは、随分とご心配をおかけしたようで、先生はよく電話をくださった。内容は今後の尾道の活動や私のプライベートな出来事に関するものが大半を占めたので割愛するが、よく「尾道の桜を見に行きたいねえ」と言ってくださった。結局それはタイミングが合わず実現しなかった。千光寺の満開の桜をご案内できなかったことが残念でならない。

先生が撒かれた種は全国へと拡がっており、何世代にもわたり芽吹いていくだろう。種は尾道にも例外なくたくさん撒いてくださり、色んな形で芽吹き始めている(…と思う)。先生には感謝の気持ちでいっぱいである。

最後に先生へ。

長い間、日本の精神保健福祉の最前線で戦ってくださり、本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございます。感謝してもしきれません。ですが個人的には、もう一度だけお話を聴きたかった。ご助言いただきたかった。背中を押していただきたかった。ただただ寂しいです…。

どうぞ安らかに…。ご冥福をお祈りいたします。

(社福)尾道のぞみ会 橋本周治

◎ 谷中輝雄先生に感謝

私の研究室には、谷中先生の書籍や講義でお使いなる文献、道具などが同居しています。朝早く出勤する私は、研究室のドアを開けると、なんとなく“おはよう”と聴こえてくるような気が今もしています。そうなのです、先生が神様に召されたなどどうも実感がわいてきません。危篤の知らせを聞いた時も、そんな、先週電話でお話していたのにと、そして今日あたり電話でしようと思っていたところでした。そして訃報が入りました。なんで、うそでしょうというのが本音でした。今もその気持ちが続いております。

大学で、先生の最後のご活躍は、宮城県から委託されたキャリアアップ支援事業の司会の役割でした。交流促進協会のセミナーと合同の開催でしたので、生前の先生のネットワークの多くの仲間たちも参加しておりました。いつもの先生らしい谷中節を聴かせてもらいました。見事な教育者でした。福祉の担い手をいかに育てるかが先生の姿でした。いかに学生たちの良いところを見つけ、育てていくのがとても得意でした。それが命でした。そういう意味では先生は役割人間でもありました。全国を走り回ったのもそうなのだと思います。そして、やさしい人間でした。とにかく全てを受け入れ、自分のものにし振りかかったものをそうと投げ返す、キャッチボールの名手でした。

ともかくにも、先生にはお世話になりました。あさかの里を設立して、やどかりの里でいつも語り合い、導いてもらいました。最後は教育の場面に引き出され、少しですが福祉の担い手を育てる仕事をさせていただきました。

いろいろ思い出は沢山あるのですが、なかなか書けないのです。感謝するのみです。ありがとうございます。

先生のご冥福をお祈りします。安らかにお眠りください。

仙台白百合女子大学 半田芳吉

◎ どうとう逝ってしまいました。

谷中先生が亡くなられたことを知らされた時、私は予想以上の衝撃を受けました。何かが終わった気持ちでした。何かが崩れたような気持ちでもありました。

そして、日々は淡々と過ぎていきました。

私は、いよいよ最後の時かもしれないと知らされたその翌日に谷中先生を尋ねる予定を立てました。その時から一時間も経たないうちに、亡くなられた知らせを受けました。やり取りが出来る確かなものを失って以来、私の心は彷徨っています。悲しくもあり、寂しくもあります。もう二度と顔を見ることも出来なければ、声を聞くことも出来ません。何かをしなくてはいけないという気持ちもあります。しかし、何をしたらいいのか分からないという気持ちもあります。谷中先生との39年間の付き合い、その中で導かれ教えられた多くのことがあるというのに、それらに私はどう向き合ったらいいのか分からないままです。

それなのに、日々は淡々と過ぎていくのです。

母親の死後、私に起きたことが同じように、いま私に起きています。私は、私の「もと」が無くなったと感じました。約一年間、本を読みあさり、自己愛と信仰についてあれこれ考えることになりました。辿り着いた言葉は、「母親に褒めて欲しかったんだ」というものでした。谷中先生の死は、私にとって、多分、母親の死と同じ意味を持って私に迫ったのだらうと感じています。

いましばらく、私には、谷中先生との付き合いの整理には、時間が必要です。それほど大きな存在でした。

ご冥福をお祈り申し上げます。

特定非営利活動法人ひつじの会 藤田安

◎ 仕事の原点

谷中先生に初めてお会いしたのは、1993年秋。

私が社会福祉法人芦山会「精神障害者通所授産施設サニークホーム」に就職して1ヶ月目のこと。

奈良県で全国精神障害者社会復帰施設連絡協議会が開催された時、谷中先生をはじめ寺田先生、新保先生が講師を務められ、参加者は総勢で25人ほどだったと記憶している。

自己紹介の時、「精神障害者通所授産施設」を言えなくてたどたどしく谷中先生を見ながら言った。その時、「それでいいよ」と励ましてくださるように先生はにこにこしながら見守ってくださった。

やどかりの里に研修に行ったとき、屋根越しに「いらっしゃい」と笑顔で皆の待っている別棟に参上し、とりとめのない、でも、「地域で精神障害者が暮らすためにどうすればいいのか」をいつまでも語り合った。

病院を退院したら精神障害のある人が地域で生活するためには「働く場所・住む場所・憩いの場」が必要だ。働く場所と住む場所は法律化できたが、なかなか「憩いの場」が受け入れてもらえない・・・。

でも・・・

谷中先生は全国の人に「どんな生活支援センターをつくりたい。どんな地域生活支援センターがあったらごく当たり前の生活ができるのか。みんなで考えよう」と勉強会を開催して熱く語りあった。

わけのわからない私にも、わけへだてなく先生は「妄想」と言っては夢を語った。

谷中先生は「妄想」を実現していった。

大変な時期にみんなで「それが大事を」の歌をこぶし振り上げながら大きな声で大合唱した時のことが思い起こされる。

～それが大事～

負けない事、投げ出さない事、逃げ出さない事、信じ抜く事

駄目になりそうな時　それが一番大事

負けない事、投げ出さない事、逃げ出さない事、信じ抜く事

涙見せてもいいよ　それを忘れなければ

OH・・・

(略) (作詞・作曲 立川俊之 唄 大事MANブラザーズ)

谷中先生に、何度か来福して頂き障害者福祉等にご尽力賜った。

「また福井に行くからね」は実現しなかった。

谷中先生から仕事の原点を教わった。心から感謝します。

谷中先生ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

福井県 松本壽江子

◎ 谷中先生へ

先生、こんにちは！北海道の上村です。先生がまた新たなプランの構想のため、旅に出たとの話を聞きました。今回は長旅になるとの話でしたね。

その話を聞いてふと、先生から「上村さん、今、大丈夫？あのね・・・。」と突然、電話が来るのか少し首を長くして待っています。

とはいえ、新たな旅に向かう前に、先生へ聞きたかったことや「これでいいのか？」という確認したいことがありました。でも、それらを解決するヒントの多くは、先生と出会っての十数年間のなかで、様々な場面や言葉の中にある「隠しアイテム」として残してくれていたのかと思いますので、今回は先生を頼らずにその「隠しアイテム」を見つけ出しながら、解決の糸口を探っていこうと思いました。これって、ある意味「自立」ですよ！

それと、もう一つ！先生からずっとヴィレッジに行くことを誘われ、ようやく3年前に行くことが出来たことは、私にとって「ターニングポイント」になったと思っています。福祉の業界に入ってちょうど「10年」という節目の年に、自分が今までやってきたことへの振り返りとともに「福祉」の「ふ」の字も知らない私が、先生から色々なことを学ばせてもらったことがどのような形で実践されているのか？その実践を踏まえて、今後どのような思いを大切に進んでいくことがメンバーさんへの「恩返し」となるのかについての再確認する機会となりました。

その時に学んだんことはいまでも鮮明に残っていて、今後どのような思いを大切に「恩返し」をしていくのかについて、徐々にではありますが、更なる「ビジョン」を練り始めました。そのビジョンについては、先生が長旅から戻ってきたときか、私が先生の宿泊している場所に行った際にはお話しさせて下さい。

最後になります、あるメンバーさんが私にこんな言葉をプレゼントしてくれました。「私にとっての上村さんは、将来の先生ですね！」という言葉です。重みのある言葉でもあります、何だかうれしい気持ちになりました。その言葉を聞いた時「私の将来の先生は、谷中先生だな」と直ぐに頭をよぎりました。なので、やはり今後もいろいろ教えて貰いたいと思っています。それでは、先生！またお会いできる日を楽しみにしています。

北海道 特定非営利活動法人 コミュニット楽創 就業・生活相談室 からびな 上村 差知

◎ 谷中先生を偲んで

私が谷中先生と初めてお会いしたのは約10年前。精神保健の仕事を始めただけの私にとって、谷中先生は「教科書に載ってた人」というのはるか遠い存在でした。その後、ヴィレッジセミナーなど精神保健福祉交流促進協会の活動を通していろんなことを教えていただきました。谷中先生には物腰柔らかかでもとても優しいというものと、腰が痛いと言いながらも国内外あちこち行かれていてとてもパワフルという「静と動」2つの印象がありました。そして私は谷中先生と会うと、いつも何か大きな力で包まれるような安心感みたいなものを感じていたように思います。当事者の人たちも、このホッとするような感じを感じてるのかもしれないな～と考えたこともありました。

生活支援の仕事にはとにかくパワーが必要。生活支援センターで毎日メンバーと付き合っていてイヤというほどにそれを感じています。でも力だけではダメで敏感で繊細な感覚や柔らかさも必要です。その両方をうまく使いこなしてこそプロフェッショナル。多くを語ることはしない「プロフェッショナル」の谷中先生から様々なことを教えていただくことができたことに感謝します。

先月のヴィレッジセミナーでのことです。ロサンゼルスに着いて最初に行くのが Marina del Rey。そこでは恒例となっている写真撮影があります。でも今回は大きなベルの下のベンチに座るはずの谷中先生がいませんでした。「なんか淋しいな～、先生来なきやダメじゃん！！また来年。」と思ったところで私の気持ちは止まっています。

生活支援センター袋井いろいろ 大田佳代

◎ 谷中輝雄先生へ

谷中先生
突然の訃報を知り茫然自失の状態です
何をどう話してよいか
言葉が見つかりません

先生は一時代を築かれ 大きな足跡を残されました
もつともつと
時代を引っ張ってくださることが期待される矢先でした

私がこの領域で仕事を始めたときから
公私にわたって導いていただきました
本当にありがとうございました

ただ今は ご冥福を祈るのみです
安らかにお眠りください

本当にありがとうございました

国際こども福祉カレッジ(新潟) 酒井昭平

◎ 谷中先生の追悼文

昨年12月29日、電話で訃報を聞いた時は、暫く何を言っているのかわかりませんでした。
精神保健福祉に関して全くの素人の私は、谷中会長の元で、色々な事を学ばせていただきました。それが、今の私の基礎となっています。

あまりに早い旅立ちは、とても残念です。

今はただご冥福をお祈りするばかりです。安らかにお眠りください。ありがとうございました。

静岡県富士市 浜田智也

◎ 谷中先生追悼文

お会いするといつも「あなたはどうしたいのか、どう考えているのか」と問いかけて下さいました。私の中の迷いや揺れを受け止めて「それでいいんだよ」とやさしい笑顔で励まして下さいました。

先生から次々と投げかけられる質問に曖昧な返事をする、「勉強不足だね」と厳しい言葉も頂きました。その言葉に「もっと頑張りなさい！」と背中を押された思いでした。

これからも先生からいただいたたくさんのお言葉を大切にして、頑張っていこうと思います。
谷中先生、先生にお会いできたことに感謝いたします。ありがとうございました。

鹿児島市精神保健福祉交流センター 町かおり

◎ 谷中先生追悼文

谷中先生を様々思ってみたけれどなかなか文にならなくて、私が谷中先生の凄さが分かるようになるのはもう少し後になってからと気付きました。

昨年イタリア研修に行った時、藤井先生が谷中先生のことを、希望の匂いがするんですよ。と話してくれました。日々追われ、気持ちの整理がつかないままの研修の中で、その言葉に涙が出そうになりました。

希望を失ったわけではないけれど、今はただ、その匂いをもう少し感じていたかったと思います。

静岡県 特定非営利活動法人ひつじの会 松下愛

◎ 谷中輝雄先生の追悼文

希望の匂いのバトンを受け継いで

新年が明け、元旦に年賀状が届いた。谷中輝雄先生の年賀状には、「去年は良かったね。」と、書き添えてあった。私も先生への年賀状に先生のおかげで、第7回イタリアの精神保健視察ツアーに行き、フランコ・バザーリア精神に触れ、日本も必ずや「命の尊厳」を主軸にした世の中が実現できそうな希望の匂いを感じたと書き綴っていた。

1月4日(木)から亀の子は仕事始めだった。メールを開けると、精神保健福祉交流促進協会事務局から、先生の訃報が届いていた。

私は呆然とし、「我が国は、まだ道半ばだと言うのに、どうして」やるせない思いが募るばかりだった。思い起こせば、私の人生の道標ともなった恩人であった。

その昔、1992年に私は精神病院の精神科ソーシャルワーカーで勤務していたころ、日本社会では誰も手掛けない社会復帰施設「やどかりの里」へ、何が何でも行きたくかった。あの当時、もう20年も前のこと。私は島根の片田舎で悶々としていた。精神病院の主人公は患者さんだと、喚いていた。そんな私の心の想いを理解してくれる人は皆無だった。一人ぼっちで孤独だった。そんな中、思い切って実費で「やどかりの里」へ出かけた。谷中輝雄先生は「金がなくても、心は錦だった。」情熱の塊だった。その情熱(パッション)は、希望の匂いも感じることができた。

その時の谷中先生の言葉が「森山さん、病院を辞めて、社会復帰施設を創設しなさい。」だった。私は目から鱗で、目が覚めたようだった。

長い暗いトンネルの中で、一筋の明かりが見えてきたようだった。

きっと、希望の匂いがしたのだろう。その情熱は確実に私を染めて前に進み始めた。

誰が何と言おうと、私は、常に前に前に進んだ。

新しい福祉事業を必要に応じて、様々な社会資源を、我が町で整備し、展開してきた。

その度に、谷中先生の言葉が脳裏を過った。

「想いを科学する当事者学」「聴くは宝なり」「ごく当たり前の生活を、実現させ、さらにより豊かな生活を手に入れられるよう、連帯の輪を広げよう」と、ここまで来るまで、数々の試練を乗り越えてきた。こうして乗り越えて来られたのも、先生の道標があったらばこそと、大いなる恩恵と感謝の賜である。

そして、去年のイタリア研修ツアーは、谷中先生からの最後のプレゼントだったかもしれない。それならば、先生の遺志を継いで、情熱(パッション)を希望に変えて、この国を染めていこうと決めた。諸行無常の響きあります。

谷中輝雄先生は、日本のフランコ・バザーリアだったかもしれませんね。

ご冥福をお祈りいたします。 合掌

島根県(社福)亀の子 総括施設長 森山登美子

◎ 谷中先生へ

私は2004年1月から公式に協会に入れて頂きました。谷中先生に入れて頂く願いをしようとお会いしたところ、最初何故か先生の態度がごちなく、「一緒に活動させて欲しい」とお願いしたところ、先生はホッとした顔をされて「実は美知子さんが忙しくしているので、彼女を辞めさせたいと言われるのかと思っていた。」と仰いました。その様な事が係わりの始まりで、9年目が終わり10年目に入ろうとする矢先の12月29日21時5分永眠されてしまいました。その僅か6時間前の15時過ぎ病院で先生と握手をし「また明日きますね」と言って別れたのが最後になってしまったのです。その時先生の目が何故か優しく返事してくれたように感じました。

その後先生の奥様から、「先生の公人としての偲ぶ会は仁木さんに頼むね」と言われていたと聞き、先生の遺言を実施するため、関連の皆様協力して頂き最大限の規模でお送りしたいと考えています。本紙をお読み頂いている皆様、どうぞお誘い合わせのうえ先生を送って下さい。ご参加宜しく申し上げます。日時は別紙参照願います。今後の協会活動は支えて下さる理事・監事・実行委員・会員の皆様が頼りです。今後とも宜しく申し上げます。

特定非営利活動法人精神保健福祉交流促進協会 事務局 仁木守

※掲載分以外に下記の方から追悼の電話やメールをいただきました。有難うございます。

聖学院大学 助川征雄様
東京家政大学 上野容子様
スローカフェたんぽぽ(岡山) 安田真里様
青森県 大嶋範子様
くすの木クリニック(大阪) 秦知津子様
久留米大学 坂本沙織様
上智大学 藤井達也様
静岡大学 南山浩二様
シャロームの会(仙台) 菊地康子様
日本女子大学 富田真奈美様
創志会(茨城県) 新保祐宣様
花園大学 三品桂子様
杉並家族会 高田美智子様
奈良県 栃本一弥様
島根県 和田節子様
鳥取県立精神保健福祉センター 植田俊幸様
東京都 三上斎美子様
医療法人福智会 福智寿彦様
同上 岡本桂子様
同上 笹川佑記様
同上 メンタルヘルスサポートセンター 樋渡敏様
愛知県 齋藤利恵様
福岡県 角直哉様
神奈川県 加藤房子様
東京都 山内洋治・はるみ様
仙台白百合女子大学 氏家靖浩様
仙台市役所 大橋雅啓様
同上 高橋智幸様
NPO 法人ソーシャルハウスさかい 中本明子様
札幌市 古川奨様
岡本病院(札幌) 佐藤志津様
さくらクリニック(大阪) 岡田良浩様
聖隷クリストファー大学大学院 中村裕子様
ちぬが丘保健センター(堺市) 小出保廣様
東京成徳大学 江間由紀夫様
東京都 田中怜子様
埼玉県 児玉洋子様
東京都 堀尾明子様
横浜市 高野静子様
千葉県 川西恭子様

(順不同:記載ミスがありましたらご容赦ください)

—編集後記— RPJNews1月号/季刊号(新年号)は例年新年を迎えての抱負を掲載しておりますが、12月29日の悲報を受け谷中輝雄理事長の追悼号として発刊させて頂きました。多くの皆様には谷中先生ご自身や当協会からの年賀状が年初には届いたことと思います。その時はお元気でしたのに、年を越せませんでした。最後に先生を偲びお悔やみ申し上げます。色々有難うございました。合掌(仁木守)

〒115-0045 北区赤羽2-45-8ファーストビス赤羽205 TEL/FAX03-5939-9603